

イルヴァの旅人とアン スリア

キール・リフレス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イルヴアの「普通の旅人」と

空の世界の「踊り子」とのお話。

作者は感覚で小説を書いている。

ついでに過去最大級に適當言ってる。

イルヴァだし仕方ないよね!!!!

なんか必要になったら書き足す。多分。

目次

| | |
|-----------------|----|
| 多分プロローグ | 1 |
| 旅人と踊り子と魔法の杖 | 9 |
| 旅人と踊り子と神様 | 16 |
| 旅人と踊り子とファンレター | 24 |
| 旅人と踊り子と料理 | 40 |
| 旅人と踊り子と商人 | 48 |
| 旅人と踊り子とポジション | 57 |
| 旅人と踊り子とアーティファクト | 64 |
| 旅人と踊り子と魔法書 | 72 |

多分プロローグ

***年 場所はどこかのネファイア（ダンジョン）にて

一人の旅人は階段を下へと降りていた。

∨随分と長いネファイアだ。

∨今は何階だったか…

旅人は根無し草とでもいうべきであった。

荷物は基本的に「四次元ポケット」の魔法ですべて運んでいて

家なんてあつてないような物だった。

∨流石に長いな…自分で対処できるだろうか？

旅人は所謂「廃人」と呼ばれるものではなかった。

あんな化け物じみた怪物にはなっていない。

いずれなるかもしれないが少なくとも今は人間をやめたつもりは無かった。

∨自分は人間ではないが。

ナレーションにツツコミを入れるな馬鹿者。

…旅人は所謂「ゴブリン」であった。

見た目は人間そのものだが。

そろそろ導入飽きた。進ませるぞ。

∨ 適當すぎないか？

やかましい。

随分と長い階段だったがやっと終わったようだ。

最下層のようだ。

ネフィア（ダンジョン）の最後にはボスがいるのが常識だが、そこには妙な物体が鎮座しているだけだった。

その物体は通称「ムーンゲート」。

その門を通るとランダムにとても狭い異世界に

飛ばされる。異世界の果てに到達すれば

元の世界に戻るのだが…

どうも妙だ。この「ムーンゲート」に違和感を感じる。

そして直感で感じ取れるだろう。

この門ⁿ

∨ 「ほい」（門に入った）

説明中!!

とうか入ったら帰ってこれないんだけどお!?

∴。嘘だろ? マジで行きやがった。

一方その頃

*** 「もう、いい加減にして! 私に付いてこないでよ!」

*** 「逃がさねえよ***ちゃん?」

∨ ∴門を出たようだ。

∨ 出た瞬間に感じる。いつもとは違う。

∨ 何が起こった?

もう少し考えて行動しろよ。

猿でも躊躇すんぞ。

∨ あーあー聞こえない。

∨ そんなことより探索を始めよう。

都合の悪い時だけ聞こえないふりしやがる∴

∴まあいい。

転移した周囲は森のようだった。

周りに命の気配は多数するが

モンスター、魔物と言えりような気配はない。

∨∴「魔法の地図」

「魔法の地図」は周囲の地図を作る魔法だ。

普段は正直使うことは無い。

∨普段なら全部探索するから

∨地図なんて勝手にできるんだよな∴

∴出来上がった地図によると

北西に道があつてそこから北に行くと

街があるようだ。

∨とりあえず街だよな∴

旅人は地図に従つて街へ向かつた。

∴道を北に向かつて歩いて暫く経つた頃。

誰かの声が聞こえる。

***「……ま……ま……じ……」

***「…や…:…:…い…」

良く聞こえないが争いが起きているようだ。

旅人は道を走る速度を上げた。

***「私に触れないでっ！」

***「残念だが捕まえたぜお嬢ちゃん…ん？」

バキッ

***「へブツ！」

旅人は獣人？の女性がおっさんに捕まっている所を見るなり

おっさんを持つていた杖で殴った。

…いや正しいんだけどさ？

もう少し事情とか聞きださない？

〽おっさんと美女なら美女一択では？

百理ある。

女性「貴方は…」

おっさん「テメエ何しやがる！」

〽少し待っていてほしい。

そう旅人は女性に言う。

女性「え…ええ。わかったわ。」

∨こいつを殺してから話を聞きたい。

女性「え？」

おっさん「え？」

旅人は素早く弓に矢を番え

おっさんに撃った。

おっさん「ひい！」

∨運がいいおっさんだ。

∨次はあゝ

女性「殺しちやだめよ！」

おっさん「ひ、人殺しイ！」

∴おっさんは街の方に逃げていった。

∨逃げられてしまった：

女性「∴助けてくれたのはありがとう。」

でも、何も殺そうとする必要は無いですよ!？」

∨何故？

女性「え？」

∨別に殺人は罪ではないだろう？

女性「」（呆然としている）

この旅人、殺人は無罪とか言っているが
実際旅人の世界では殺人は無罪である。
だから仕方ないと言えば仕方ないのだ。

女性「：ちよつと説明してもらえる？」

云々の説明中

女性「：まさかそんなことがあり得るなんて。

：でも実際起こっている訳だし：」

∨考えても仕方ないと思うが。

女性「一番の当事者のあなたが言うの：：？

で、どうするの？異世界から来た旅人さん？」

∨その事だが提案がある。

女性「：何かしら。」

∨貴方は結構な頻度でこのような目に遭うと言っていたが。

女性「そうね。」

∨自分をボディーガードとして雇わないか?…アンスリア。

アンスリア「…ええ?」

こいつ本気で雇われるつもりか…?

やめとけ向いてないぞ?

というか雇う訳ねーだろ…

1か月後

半殺しになった盗賊たちに指を指して旅人が言う。

∨始末するか?

アンスリア「止めなさい。」

何で雇ったんですか…?

アンスリア「魔が差したのよ。」

あんたもナレーションにツツコミいれるのか…

彼らの旅が始まる…のか?

旅人と踊り子と魔法の杖

今、旅人とアンスリアは次の町への道中にあつた。
もう辺りは暗くなっている。

彼らは街道沿いに火を焚いてテントを張っている。

旅人にとっては日常的に行っていることである。

何せ家に帰ってないのだから。

∨：（棒状の物を手入れしている。）

何しとるんやこいつ。

アンスリア「：何してるの？」

∨魔法の杖の手入れ。

アンスリア「魔法の杖：？」

∨少し言い方が悪かったか。

∨これは装備ではなく魔道具としての杖だ。

この魔法の杖、イルヴァではよく手に入る。

ダンジョンに入れば馬鹿みたいに落ちているのだ。

まあ強力な杖は見つかりにくいのだが。

アンスリア「どんな効果なの？」

∨説明するより見せた方が早い。

旅人は杖を森の方に振った。

一瞬で扉ができた。

アンスリア「??」

混乱するのも無理はない。

扉が壁も天井もないところに急にできたのだ。

支えもないところに見事に立っている。

アンスリア「…ええ？」

扉の周りを回ってみたが不審な所は無い。

いや扉だけ立ってる時点で不審だが。

扉を開けてもどこかに繋がるわけでもない。

∨…ふんっ！（ドカッ）

アンスリア「あっ」

蹴っ飛ばすと扉は消えた。

アンスリア「…何のための道具なの？」

∨ 知らん。

アンスリア「ええ…？」

実際使い道はほぼ無い。

建築に使うかな、位のものだ。

というか普通の人は自分で建築なんかしない。

まあこんな風に使い道の限られる杖もあれば

よく使う杖もある。

∨ 他にこんな杖がある。

アンスリア「どんな効果なの？」

∨ …（無言でその辺の石に杖を振った）

石がルビーになった。

アンスリア「嘘…」

∨ 今日随分と運がいい。

この杖は「錬金術の杖」。

物に向かって振ると対象を変化させる。

大体同系統の物になる。

∨ つまり鉱石の分類の石から

◇ 同じ鉱石のルビーになった訳だ。

アンスリア「錬金術ってそんなものなの？」

◇ この世界の錬金術がどんなものかは知らない。

◇ まあうちの世界の錬金術以上に頭のおかしい物ではないだろう。

この旅人、錬金術が趣味である。

実際ポーションを自前で合成できると便利なのだ。

◇ 後は…アレだな。

◇ 「マジックミサイルの杖」。

◇ これは君が持っているべきだろう。

アンスリア「…これは？」

◇ 振ってみればいい。

アンスリアはちよつと警戒しながら

杖をふった。

杖から魔力の弾丸が出て

射線の先にあつた木の幹を粉碎した。

アンスリア「これ、私が持つのか？」

◇ 護身用には丁度いい。

アンスリア「明らかに過剰でしょうこれ。」

∨何のことやら。

アンスリア「しかもこれ結構価値が高いんじゃない？」

この杖から出た弾丸、無属性である。

旅人の世界ではそこまで貴重では無かったが

ここでは無属性を扱える人物は限られている。

道具一つで無属性攻撃ができるとなれば

そこそこの価値が付くのは間違いない。

∨でもこれ道端に落ちてるような杖なんだよな。

∨無属性なんてありふれた物だったから。

アンスリア「やっぱり世界が違えば価値観も違うのね。

命の価値ですら違うんだから…」

∨それは言わないでくれ。

∨向こうでは命の価値は紙くず以下だった。

∨今は君が教えてくれた。

∨それでいいじゃないか。

アンスリア「その割にはよくやりすぎているような気がするけど…」

∨ 仕事だからな。

この旅人、ボディーガードである。

諸事情で無駄に素早いので

暴漢どもを一方的に殴れるのだが

大体半殺しにしている。

∨ 生きているなら問題なし。

アンスリア「問題ない訳ないじゃないお馬鹿。

いや、最初に比べたらすごい進歩なんだけど。」

それでいいのか。

翌日。

そこには杖を振り回して魔法の弾を魔物に乱射する

アンスリアの姿があった。

アンスリア「これ楽しいわ！」

∨ そうですか。

どうしてこうなった。

∨ 俺が悪いのか？

お前が悪いよ。

旅人と踊り子と神様

∨…。

旅人は何かに向かって祈っている。

少し小さめの机のようなものだ。

アンスリア「…？」（何処から出したのかしら…？）

∨…ああ、居たのか。

アンスリア「何してるの？」

∨神様にお祈りをな。

アンスリア「冗談でしょう？」

∨どういう意味だ、おい。

普段の行いのせいだと思います。

アンスリア「それで？ 貴方が神様に祈るなんて

初めて見たけれど…」

∨そこまで熱心ではないからな。

∨でも思い立った時に祈るくらいはしている。

アンスリア「へえ…どんな神様なの？」

∨ 農業の神様。

アンスリア「何で!？」

実際便利なのだ。

何せ食べ物腐らせてしまった時

勝手に植物(?)の種になるのだ。

アンスリア「変わった神様もいるのね。」

∨ まだマシな方だが。

∨ さっき農業の神と言ったが

∨ 正確には収穫の神様だ。

∨ あまり争いを好まない神様だよ。

アンスリア「争いを好まないって所は

貴方と合っていないと思うわ…」

∨ 失礼な。

∨ 降りかかる火の粉を元から断つただけだ。

∨ それに他の一部の神様はキャラが濃いな。

本当に濃い。いやマジで。

アンスリア「例えば？」

∨：先にどんな神様が居るか言っておこうか。

∨機械のマニ。

∨風のルルウイ。

∨元素のイツパロトル。

∨収穫のクミロミ。

∨地のオパートス。

∨幸運のエヘカトル。

∨癒しのジユア。

∨それと：無のエイス：は違うか。

アンスリア「結構いるのね。」

∨それぞれ信仰によって力が得られる。

神様の特徴について旅人は説明する。

∨機械のマニ。知らん。

アンスリア「知らないって貴方：」

∨いや本当に知らん。

∨触れたことも無いんだもの。

∨ただ：銃に補正が得られるんだったか。

アンスリア「銃使いならマニを信仰するの？」

∨そうでもない。と思う。

アンスリア「それは：何で？」

∨単純に他の神様の加護が分かりやすく強い。

因みにマニを信仰すると罫が分解できるようになる。
以上。

∨風のルルウィ。迷ったらこれでいい。

アンスリア「それは：どうして？」

∨速度を上げてくれる。

∨実際実感しやすい。

∨ただ：

アンスリア「ただ：何かしら。」

∨ルルウィはドSの露出狂女神。

アンスリア「え。」

なお個人的意見である。

◇次。元素のイツパロトル。

◇元素…というか魔法の神様。

アンスリア「魔法使いに…おすすめじやなかったり？」

◇まあ…うん。

◇できるよになることが確か…

◇魔力の回復。で加護が属性耐性。

アンスリア「普通にいいじゃない。」

◇両方とも魔法及び杖で誰でも出来るんですよ…

アンスリア「一気に価値が下がったわね。」

◇ちなみにルルウイの速度上昇も魔法で出来る。

実際大体が魔法及びスキルで代用出来たり。

◇次。収穫のクミロミ。

アンスリア「貴方が信仰している神様ね。」

◇さつきも言っただけど大体の神様の恩恵は

◇魔法とかで代用できる。

◇でもクミロミの恩恵は再現できない。

アンスリア「食べ物腐ったら…て奴？」

∨ それ。

∨ それで得られる種は色々便利なんだけど…

∨ その話はまた今度。

∨ で、地のオパートス。

∨ 大地の神様だな。

∨ 攻撃力と防御力が上がる。

∨ アンスリア「貴方の世界では空に島が浮いてないのよね？」

∨ そうだな。

∨ 実際どんな感じか言葉では説明しにくいな…

∨ 空に浮いていることが当然の世界と

∨ 浮いていることがおかしい世界と

∨ 常識が違うのだ。説明もしにくいだろう。

∨ まあいい。次は幸運のエヘカトル。

∨ アンスリア「分かりやすい神様ね。」

∨ そのまま幸運になるからな。

∨ ただ恩恵はちよつと変だ。

∨ アンスリア「運が良くなるだけじゃないの？」

- ◇魔法の消費魔力がランダムに
- ◇増えたり減ったりする。
- ◇アンスリア「増えるの!？」
- ◇増える。運が悪いと。
- ◇アンスリア「でも運が上がる神様なのよね？」
- ◇実際平均すると消費減少になってるらしい。
- ◇で、最後に癒しのジュア。
- ◇アンスリア「これも分かりやすいわね。」
- ◇体力を使って傷を癒すことができるようになる。
- ◇魔法が使えなくても回復手段が手に入る。
- ◇純戦士なんかは信仰してたり。
- ◇アンスリア「なるほど？」
- ◇で、実は全部の神様の祭壇を持ち運んでいる。
- ◇こいつアホである。使う予定ないじゃん。
- ◇どれか試しに信仰してみるか？

後日。

アンスリア「ドンドン行くわ！それっ！」

∨早いな…流石ルルウイ。

ドS様を信仰したようです。

TA確定かな？

旅人と踊り子とファンレター

それは公演が終了した後の事だった。

いつものように厄介なファンたちが沸き、

それをあらかた掃除し終わった後、

エールーンらしき女性がやってきた。

女性「あの…」

∨…（ガン見）

女性「ひっ…」

アンスリア「怖がらせないの。」

女性はアンスリアに手紙を渡そうとしている。

女性「あの、私ファンで、その、手紙を…」

アンスリア「あら…ありがとう。」

その手紙をアンスリアが受け取った瞬間、

女性が笑ったのを旅人は見逃さなかった。

間違いなくあれは悪意ある笑みであると。

▽「鑑定」。

旅人はファンレターに魔法を使った。

ファンレター（呪いの手紙）

ファンレターとして書かれたとされているが
中に入っているのは服従の呪いである。

出所は不明だが一般の人間では

この呪いは掛けられないだろう。

開けたが最後抵抗できなければ

術者の言いなりになる。

女性「その…この場でy」

旅人は女性の両足を折り、

手紙をアンスリアから奪い取った。

女性「くっ」（言語化できない叫び）

▽一切の容赦はしない。

アンスリア「な、何をして」

∨ 呪いだ。

アンスリア「え？」

∨ この手紙には呪いが掛けられている。

アンスリア「嘘……」

∨ この手紙について聞きださなければ。

∨ 秩序のに嗅ぎつけられるのも面倒だ。

アンスリア「どうするの？」

∨ 「テレポート」。

3人はどこかに消えた。

結構離れた路地裏

ブオン……と音がして3人が現れた。

辺りに人の気配はしない。

∨ 尋問を開始する。

女性「話す事なんて……」

アンスリア「何をするつもりなの……？」

∨ グロテスクなことはしない。簡単な事だ。

∨「支配」。

旅人は「支配」の魔法を使った。

女性から抵抗が消えた。

∨全部話せ。

女性「はい。」

アンスリア「どういう事…?」

∨ちよつとした洗脳みたいなものだ。

実際敵を永続で味方にする訳だし。

∨まずは…誰からの指示だ。

女性「この町の長のワルイ・ヤーツ様です。」

∨もう少しいい名前無かったの?

アンスリア「ひどい名前ね。」

やかましい。やられ役だしええやろ。

∨で、どんな奴だ。

女性「趣味の悪い成金です。」

正直使われているのもいい気はしませんでした。

人身売買なんかにも手を出していて

薬物なんかにも…手を出していません。」

▽随分と分かりやすいクズだ。

アンスリア「秩序の騎空団に…」

女性「多分無駄ですよ。」

▽そういうクズは大体対策している。

少なくとも旅人は人身売買については

人の事は言えないだろう。

▽失礼な。俺は奴隷屋に行つたことは無い。

▽で、何が目的だ。

▽大体察しは付くが。

女性「アンスリアさんをコレクションの

一人にしたかったようで…」

アンスリア「気持ち悪い…」

▽イルヴァの変態に比べればマシだが

▽こちらでは十分にクソだな。

イルヴァにはネームドの乳や卵を集める変態が居る。

他にもいろんな変態が居るので

皆も探してみよう。

∨とりあえずそいつは殺す。

∨アンスリアが駄目と言つても殺す。

アンスリア「∴止めないわよ、今回は。

∴私にとつても気分のいい話じゃないし。

ただ、バレない様にして。

貴方は私のボディガードでしょ？」

∨∴了解した。

∨で、そのクズの行動や特徴。

∨その他にも情報があれば教えろ。

女性「はい∴」

情報

標的：ワルイ・ヤーツ

街の長である。成金であり、

地位も金で買ったようだ。

行動

予定が無ければ屋敷の中で

コレクションで遊んでいるようだ。

敢えて詳しくは言わない。

予定があれば外出するが

街の長としての仕事は実質的に放棄している。

なので出かける時は薬物及び人身売買関係。

地理

標的の屋敷は3階建て。

コレクションは地下に居る。

私室は3階の奥にあり、

そこから地下に下りられる。

警備

自分が狙われる事が分かっているのだろう。

相当に警備は厚い。

敷地外の警備も厚く、

途切れる時間もない。

敷地内では用心棒が交代制で

最低でも10人うろついているようだ。
何処からこんな金が出ている…？

∨情報はこんな所か。

女性「私は…」

∨「テレポートアザー」。

女性はどこかへ消えた。

アンスリア「何処へ行ったの？」

∨知らん。が、支配した以上敵対はしない。

∨善は急げと言うらしい。

∨早速殺しに行つてくる。

アンスリア「え？作戦とかはいいの？」

∨作戦ならある。

アンスリア「どんな？」

∨皆殺しだ。

ジェノサイドパーティー、開始イ！

豪邸が見える。標的の家だ。

女性が言うには今日は地下に居るそうだ。

∨襲撃前に：「インコグニート」。

旅人の姿が変わる。

何処にでもいそうな男だ。

∨さあ、殺戮を始めよう。「加速」。

旅人が動き出す。その速度は人間が感知できるギリギリの速度であった。

そして門と玄関の前で立ち止まり、

∨「轟音の波動」。

辺りに衝撃破が飛ぶ。

この魔法は音属性であるが、

この世界においては無属性に近い効果である。

耐性を持つことが非常に難しい属性の攻撃。

かつ広範囲に及ぶこの魔法によって

門から玄関までは無残に破壊され、

周辺の警備員は衝撃波によって引きちぎられた。

∨弱い。

∨俺もそこまで強くは無いや言うのに。

弱いと言つてもこの男中堅クラスである。

あのイカれた世界での中堅だ。

そらこうなるよ。

∨まあいい、殺す。

殺意はそのままに旅人は侵入する。

三階まで階段を駆け上がると奥に扉が見える。

しかし、その前に情報通り用心棒が居る。

見た感じ9人だ。

∨そんなことはどうでもいい。

∨死ね。「暗黒の光線」。

用心棒に向かって黒い閃光が奔る。

回避も許されずに彼らの体を

闇の閃光が穿つ。

本来なら回避や防御もできただろう。

しかし現在旅人は加速状態にある。

反応できても常人では体が間に合わない。

まあ生きていたとしても状態異常に苦しめられるが。

∨ 排除終了。殺す。

殺意が高すぎんか貴様。

三階、標的の私室に突入。

∨ 誰もいない。

∨ 「轟音の波動」。

私室が吹き飛んだ。

下へ降りる階段が見える。

∨ 殺す。

語彙力どうした？

エーテル病か？

階段を下りていく。

次第に男が喚く声が聞こえてくる。

ワルイ・ヤーツ「クソ、訳立たずがあ！」

∨ 聞きたくもない声だ。

∨ 「暗黒の矢」。

ワルイ・ヤーツ 「な n」

バキユツ：

頭を爆散させて死んだ。

あつけない死にざまだ。

∨ こいつにくれてやるには上等すぎる死だ。

∨ もつと苦しめてやりたかったが：

時間がない。すぐに立ち去る。

∨ …。

そこにはコレクションと呼ばれていたであろう

人々が居た。

本来なら目撃者として殺しておくべきだ。

しかし旅人は殺さなかった。

∨ 随分とこちら側に慣れてきたな。

∨ 向こうの世界なら殺していた。

旅人は館から去ろうと玄関を出る。

…出ようとした。

*** 「止まれ！」

∨ ……何だ？

*** 「秩序の騎空団だ！

お前をこの事件の首謀者として拘束する！」

秩序さん早くない？

∨ やつて見せろよ間抜けの正義の味方。

秩序の騎空団団員 「掛かれえ!!」

団員達 「!!!」

∨ 阿呆が。

∨ 「闇の霧」。

団員 「クソ、周りが見えない！」

∨ さようなら、無能諸君。

∨ 「レポート」。

旅人はその場から消え去った。

団員 「逃げられたか…」

団員 「班長、屋敷から死体が多数発見されました。」

団員（班長）「奴が…やったのか。」

団員「それと追加の報告です。」

団員（班長）「何だ。」

団員「町長の私室に隠し通路があつたようで…

そこから行方不明者とみられる人物が見つかりました。」

団員（班長）「何イ！」

何処かの家の屋根の上に旅人が現れた。

∨：「インコグニート」を解除。

∨ 集合場所へ急ごう。

∨ アンスリア。

アンスリア「終わったの？」

∨ 全部終わらせた。

∨ 早くこの町から離れよう。

後日。

館からは大量の悪事の証拠が見つかったようだ。
それに付随して芋づる式に
悪人が捕まったらしい。
それはそれとして。

WANTED

名称不明

賞金

10万ルピ

罪状

殺人 器物破損

先日殺人と器物破損を行った人物である。

標的となった人物は悪人であったが

殺人罪と器物破損で手配を行う。

なお、事情を考慮し生け捕りのみとする。

アンスリア「指名手配だって、怖いわね。」

〈ほつといてくれ。〉

旅人と踊り子と料理

それはある日の昼の事。

∨…モグモグ。

アンスリア「何食べてるの？」

∨ふかふかパン。

アンスリア「あら、美味しそうじゃない。

私の分とかあつたりするかしら？」

∨別に大丈夫だけど、そこまでの物じゃないぞ？

旅人はアンスリアにふかふかパンを渡す。

アンスリアはふかふかパンを食べた。

アンスリア「…パンね。」

∨パンだ。

アンスリア「…いや、美味しいんだけどね？」

∨言いたいことは分かる。

このふかふかパン。

食べられないことは無いし不味い訳でもない。

…だが特別美味しいというわけでもない。

率直に言つて微妙。

名前通りふかふかの食感なのが救いだらうか。

少なくともパン屋で売る物じゃない。

アンスリア「これどこで売つてたの？」

…売つてない。

アンスリア「…貴方が作つたの？」

…そうなる。

…だが勘違いしないでほしい。

…別に料理が苦手というわけではないのだ。

アンスリア「…ふーん？」

…だつてこれ錬金術の範囲だし。

アンスリア「え？」

嘘は言っていない。

実際錬金術のカテゴリに入る。

…誰が作つても一律でこの味だ。

∨料理ができない奴でも

∨錬金術があれば一応できる。

∨アンスリア「まあ、便利…なのかしら？」

∨実際かなり便利だ。

∨何しろ原材料は何でもいいからな。

∨アンスリア「何でも？　どういう事？」

∨言葉通りだが？

∨要は…何だ。

∨その辺に落ちてる石とか草とか。

∨最悪*放送禁止*でもいい。

∨何を使ってもこの味になる。

∨アンスリア「え…？　でしょ…」

∨じゃあ…これ…」

∨安心しろ。

∨流石に俺も*放送禁止*を使ったものは

∨食べたくない。

∨それはルピから錬成したものだ。

因みに。

イルヴァとグラブルの貨幣はそれぞれ

GPとルピと言う。

これ等を等価としたとき：

1ルピからパンが錬成できる訳だが。

このパン、大体50ルピで売れる。

売るところがあれば大儲けである。

なお、この世界でこの商売をやろうとするには

味という問題があるのでできるかどうかで言うと

絶対にできない。

自分で食べる分にはいいんじゃない？

▽因みに俺は料理は可もなく不可もなく、だ。

アンスリア「私も普通かしら：」

▽まあ、装備による補正なんかもあるが：

アンスリア「そんな便利なものがあるの？」

▽装備一式そろえなきゃ微々たるものだ。

▽料理と言えば：いい調理器具がある。

∨ 「四次元ポケット」。

∨ これだ。

アンスリア 「えーとこれって…どう見ても…」

∨ バーベキューセットだ。

∨ まあ見ている。

旅人はバーベキューセットでリングを調理した。

リングのクレープが出来た。

アンスリア 「…あれ？」

∨ 次は…

旅人はバーベキューセットでレタスを調理した。

レタスのサラダが出来た。

アンスリア 「待つてそれバーベキューセット関係ないわよ!？」

∨ 細かいことは気にするな。

アンスリア 「どうか今気付いたけど、

料理のできるスピードおかしくなかったかしら？」

∨ と言うと？

アンスリア 「瞬きの間に出来るのは

明らかにおかしいでしょう!？」
仕様です。

アンスリア「何の!？」

▽まあ早く食べられるんだからいいじゃないか。

アンスリア「…分かったわ。

…あ、クレープ美味しい…」

後日。

旅人はバーベキューセットで*解読不能*を調理した。

冒流的な*解読不能*が出来た。

アンスリア「…何、してるの？」

▽物は試しだ。

アンスリア「止めなさいよ絶対碌な事にならないわよこれ!」

▽いただきます。

アンスリア「あ、ちよつと!」

旅人は冒流的な*解読不能*を食べた。

▽くあwせdrftgyふじこlp;@:「」

アンスリア「だから言ったのに！」

∨ 宇宙の色が見える。

∨ 天の光が逆流する。

∨ 遍く全てが輪廻する。

∨ ああ…真理は此処に。

アンスリア「何か変な悟りを開いてない!?

戻つてきなさい!」「ロツソ・パツシオーネ!」

∨ 痛い…

∨ おれは しようきに もどった!

アンスリア「…念のためもう一発。

「ロツソ・パツシオーネ!」

∨ 地味に痛いんだこれが…

∨ もう大丈夫だ。

∨ …多分。

アンスリア「私じゃ貴方を止められないんだから…

しつかりしてよね。」

∨ 善処します。

アンスリア「早くアレ処分して出発しましょう？」

∨そうだな。…。おかしいな？

∨食べ残した奴どこ行つた…？

…テケリ・リ…テケリ・リ…

…。まあ、大丈夫だろう。

旅人と踊り子と商人

旅の途中。とある町にて。

◇：そろそろ買い物がしたいな。

◇それもかなり大量に。

アンスリア「どうしたの？」

◇：貴方大体自分で作れるわよね？」

◇いや無理な物だつてあるし。

◇それにこの世界の物を作ることは

◇まだ出来ていない。

◇もう少し知識が必要である。

◇指輪とかどうなつてんだあれ。

◇それに情報も欲しい。

◇情報は命を救うのだ。

アンスリア「否定はしないけど：」

◇そういうわけで商人と接触したい。

∨ 誰か良い商人はいないだろうか。

アンスリア「まあ、当てが無くはない…けど。」

∨ じゃあ早速行こう。

アンスリア「…お金持ってるの？」

∨ どうとでもなる。

アンスリア「それって…」

∨ 無論合法である。安心してくれ。

アンスリア「なら、いいんだけど。」

アンスリア「えつと…ここなんだけど…」

∨ あの人か。

シエロカルテ「いらつしやくい！旅支度はシエロちゃんにお任せ〜！」

∨ 少しいいか。

シエロカルテ「はい？何でしょう〜？」

∨ これの売却はできるか。

旅人は10個ほどの宝石を出した。

ダイヤモンドやエメラルドなど多種であり、

全て原石である。

シエロカルテ「え〜…問題はありませんが〜…」

〜何か？

シエロカルテ「その、見た感じその他にも

大量に持つていらつしやるようです。

…その、何処から手に入れたんでしょうか〜？」

〜心配するな、足はつかん。

アンスリア「言い方ア！」

バシイ！

アンスリアは結構な勢いで旅人の頭をはたいた。

実際言い方が悪すぎる。

〜痛いぞ。

アンスリア「言い方があるでしょう!？」

…あつ、こんにはシエロカルテさん。」

シエロカルテ「こんにはアンスリアさん。

…お連れ様です？」

アンスリア「ええ、一応。…ボディーガードです。」

〈どうも、ボディーガードです。

シエロカルテ「は、はあ：そうですねえか。

：で、この宝石類はどうなんでしょう？」

アンスリア「一応安全って事は保障するわ。」

〈失敬な。絶対安全だ。

アンスリア「信用って言葉知ってる？」

シエロカルテ「：では買取価格はこんな感じですよ。」

〈どうなんだ？

アンスリア「この人は商人として信頼して大丈夫よ。」

〈じゃあ、それでいい。

〈で、ここではどんな物を売ってるんだ？

シエロカルテ「そうですねえどんな物と言われると

少し難しいですよ。相当珍しい物でなければ

言ってくれば頑張って仕入れますよ。」

〈そうか。じゃあ商品を見させてもらおうぞ。

〈ついでに「鑑定」の魔法を使ってもいいだろうか。

「商品に害はない。」

シエロカルテ「構いませんよ。」

あ、どんな結果になったか教えてくださいね？」

真なる〇のアニマ

〈全ての根源たる〇の結晶〉

各六属性に対応したアニマが存在する。

純粋なエネルギーの結晶であり、

加工には技術が必要だろう。

錬金術・大工・宝石細工で使用可能…？

ちよつと工夫すれば手榴弾のように

爆発させることもできそうだ。

アニマ：〇〇

コロツサス・リヴァイアサン

ユグドラシル・ティアマト

シュヴァリエ・セレスト

のアニマ。

真なるアニマと違い純粋なエネルギーでは無く、

既に方向性が決まっているエネルギーの結晶。

簡単に言うとそのそれぞれの星晶獣の権能を

エネルギーの結晶としている。

既に方向性が決まっているため

加工は容易だが用途が限られる。

錬金術・大工・宝石細工で使用可能…？

プロミネンスリアクター

海神の扇尾

創樹の花蕾

嵐竜の琥珀眼

プライマルビット

黒霧の結晶

コロツサス・リヴァイアサン

ユグドラシル・ティアマト

シュヴァリエ・セレスト

から取れた素材。

星晶獣由来の素材であるからか

一般的な素材より加工が難しい。

うまく加工すれば加護が付くかもしれない。

錬金術・大工で使用可能…？

栄冠の指輪

着けると装着者に強化効果をもたらす。

しかしその強化はランダムである。

また、一度外すと二度と効果を発揮しない。

故に強化が気に入らなければ

代わりの指輪でやり直すしかない。

錬金術で使用可能…？

～と、まあこんな感じになった。

アンスリア「錬金術が万能すぎない？」

～それは自分でもそう思う。

シエロカルテ「新しい加工法…気になりますね。」

～自分以外で再現性があるとは思えないので諦める。

アンスリア「帝国による指名手配だっけ？」

∨ まあ、あの商人が手を貸している以上

∨ 恐らくは白なんだろうが。

アンスリア「∴。助けてほしい、って事でいいのよね？」

∨ 多分。

∨ だが商人の独断だろうな。

∨ まあどつちでもいい。

∨ ボディーガードであるからにはお前に従う。

∨ どうする∴アンスリア。

アンスリア「まあ、機会があれば手を貸しましょうか。」

旅人と踊り子とポーション

またまた旅の途中。

旅人は何かの道具をいじっている…

▽…まあ、こんな感じか。

アンスリア「何してるの？」

▽ポーションを作っている。

アンスリア「ああ、回復薬？」

▽違う。

アンスリア「…じゃあ何作ってるの？」

▽「鈍足のポーション」。

▽飲むと速度が遅くなる。

アンスリア「毒じゃない。…敵にどうやって飲ませるのよ。」

▽自分で飲む。

アンスリア「ええ？…駄目、分からないわ。

それを飲むと速度が遅くなるんでしょう？」

∨ 特殊な処理をすると若返る薬になる。

アンスリア「…とんでもない薬じゃない…」

特殊な処理とは難しい事ではなく

ポジションを祝福することだ。

鈍足のポジションを祝福する事で

12歳くらいまで若返ることができる。

アンスリア「ほかにどんなポジションがあるの？」

∨ 逆に「加速のポジション」がある。

アンスリア「…なら、もしかしてそれに

特殊な処理って言ってたのをする

歳を取ったり…？」

∨ 正解。処理は違うけど…

∨ 確かに飲むと老化する薬になる。

アンスリア「何と言うか、需要のありそうな薬ね。」

∨ 向こうではありふれた薬だが。

アンスリア「こつちじゃそんな薬は無いの。

出来るとしたら…星晶獣か…

もしかしたら錬金術のすごい人なら出来るかもね。」

◇ そうなのか。

◇ 逆にこちらからすると貴重な物がある。

アンスリア「それは…何かしら。」

◇ 「水」。

アンスリア「水？ どうして？」

◇ ポーションや酒で水分は取れる。

◇ と言うか向こうの世界の水分補給は

◇ 乳かポーションだ。

◇ でも純粋な水ってのは手に入りにくかった。

アンスリア「そうなの？ 川とか井戸とかは？」

◇ あったよ。でも汲むと何故かポーションが汲める。

◇ 直接飲む人もいたけど…おすすめでできない。

アンスリア「何でお勧めできないの？」

◇ エイリアンに寄生される。

アンスリア「は？ 何て言ったの？」

◇ エイリアンに寄生される。

◇ 正確に言うとはエイリアンの卵が

◇ 体内に入り込む事がある。

◇ そいつらはそのまま体内で成長して

◇ 腹を食い破って出てくる。

◇ アンスリア「うう：聞いているだけで

◇ 気分が悪くなってきたわ：」

◇ 正直俺も気分が悪くなってきた。

◇ まあ、何だ。

◇ 安全かどうか分からない物は

◇ 食べたり飲んだりするなって事だ。

◇ アンスリア「：出来るなら水を出す魔法とか

◇ 覚えたくなってきたわ。」

◇ 同感だ。

◇ :ああ、そうだ。

◇ このポーシオン、飲んでみないか？

◇ 「潜在能力のポーシオン」だ。

アンスリア「飲むと潜在能力が発揮されるのかしら？」

～いや、潜在能力が増える。

アンスリア「増える…？」

～そうだな…何と言うか。

～能力の上限が増えるというべきか。

～例えばドラフの男は平均して力が強い。

～で、そうだな…まあ、エルーンの女性は

～そこまで力自慢では無いだろ？

アンスリア「まあ、そうね。」

～正直、どれだけ鍛えてもあそこまで

～力が出るようにはならない筈だ。

～要は種族の成長限界が来る。

～で、この成長限界をちよつと高くするのが

～この薬だ。多分。

アンスリア「多分って…要はエルーンの姿で

ドラフ並の力が出るようになるって事？」

～鍛えればな。

◇ 無論潜在能力が高ければ能力も上がりやすい訳だから

◇ とりあえず飲んでおけば強くなりやすい。筈。

アンスリア「筈って何よ。

自信を持つて言い切ってくれば

迷わず飲めるのに自信なさそうだと

ちよつと怖いじゃない…」

◇ まあ、悪い事にはならん。きつと。

アンスリア「貴方わざとやってない？」

◇ 割と。

アンスリア「…」

バキッ

◇ 痛い！

◇ 何か最近暴力的になった気がする。

アンスリア「誰のせいだと…？」

◇ 誰か原因があるのか？（すつとぼけ）

アンスリア「…」（殴る構え）

∨ 悪かったって…

∨ で？飲むの？

アンスリア「…飲むわよ！…。不味い…」

∨ 薬だもの。仕方ない。

アンスリア「…で？これ一本でどの位効果があるの？」

∨ 知らん。

∨ とりあえず大量に飲もうか。

∨ 一日一本。頑張りましょう。

アンスリア「え？この不味いのを？…ええ…」

∨ 頑張れ。（ニヤニヤ）

アンスリア「…頑張る。で、貴方の頭を全力で殴るわ。」

∨ 勘弁してくれ。

∨ 頭が柘榴になってしまう。

アンスリア「もう決めたもの。諦めて？」

∨ …まずいことになった。

殴られても死にはしない筈だろ。

多分。祈れ。

旅人と踊り子とアーティファクト

本日も旅の途中。

丁度魔物との戦闘中のようだ。

魔物「grrrraaaaa!」

▽（棘だらけの盾で防ぐ）

魔物「gyaaaaa!」

▽うるせえ！（杖で殴る）

魔物「gya...」

▽終わったぞ。

アンスリア「お疲れ様。

所で聞きたい事があるんだけど…いい？」

▽何だ？

アンスリア「あの棘だらけの盾…何？

あれ防具と言うより武器よね？」

∨ 大体あつてる。

∨ 因みに名前は「棘の盾」だ。

∨ アンスリア「そのまんまじゃないの。」

∨ そういう名前だからな。

∨ 因みに珊瑚製だ。

∨ アンスリア「脆そう……」

∨ でも壊れないんだよこれ。

∨ で、これ「固定アーティファクト」って言うんだけど。

∨ これらは変わった効果がついていたり

∨ かなり強かったりする。

∨ 因みに杖もそうだったり。

∨ アンスリア「何て名前なの？」

∨ 「狂気の杖」。

∨ アンスリア「うわ……使いたくない杖ね。」

∨ 性能はいい。

∨ まあ……何だ。アレよりはマシだ。

∨ アンスリア「何？もつと変なのがあるの？」

∨ ……ある。

∨ と言うよりも武器として扱うのがおかしい物がある。

アンスリア「…聞いてもいい？」

∨ ……

∨ いいけど…その…何だ。

∨ 「シーナのパンティー」って武器がだな。

アンスリア「…最低！」

ブオン！

∨ 危ないな！俺に言わないでくれ。

∨ 向こうじゃギヤルのパンティーっていう

∨ 武器種があつたんだよ…

尚、めちやくちや強い。

序盤ならパンティー無双できるぞ。

アンスリア「そんなのしかないの？」

∨ いや「ホーリーランス」とかあつたけど。

アンスリア「ちゃんとした名前のも

あるじゃない！」

- ◇ 普段使ってるのがこれなんだよ。
- ◇ あとパンティーは完全にネタ武器と思いきや
- ◇ 普通に使えるから…
- ◇ アンスリア「何？それで殴るの？」
- ◇ いや投げる。
- ◇ アンスリア「投げる…？」
- ◇ 投擲武器だからな。
- ◇ 当たると敵は発狂して死ぬ。
- ◇ アンスリア「発狂…？何で？」
- ◇ 知らん。でも当たると発狂して死ぬ。
- ◇ アンスリア「意味が分からないわ。」
- ◇ 理解したくないの間違いでは？
- ◇ なーんでパンティーぶつけられると頭が破裂するんですかね…？
- ◇ ……あ、要る？
- ◇ アンスリア「要らないっ！」
- ◇ 持ってた方がいいと思うけど。

∨別にパンティーだから重くないし。

アンスリア「…それ持ち運びどうするの？」

∨まあ…アレだな。

∨ポケットに入れたり腰に着けたり？

アンスリア「絶つつつつつ対に嫌！」

∨身を守るのにいいと思っただが。

世間体と言うモノを考えろよ。

∨(荷物の中に紛れ込ませるか…)

絶対やめろ。

∨ああ、そうだ。

∨もし良ければこれ使ってみないか。

アンスリア「なにこれ。装饰品？」

∨「パルミア・プライド」と「アルバレスト」だ。

パルミア・プライド

詠唱「*」

混沌耐性「***」

暗黒耐性「***」

運勢+15

速度+8

魅力+12

スリ防止

アルバレスト

クロスボウ「*****」

電撃耐性「**」

追加射撃の機会「*****+」

▪

アンスリア「えーと…?」

∨こつちの世界に直すと…

∨だいたいこんな感じ。

パルミア・プライド

CT減少(小)

闇属性耐性（中）

状態異常耐性（中）

運上昇（中）

回避上昇（小）

確率魅了付与（小）

スリ防止

アルバレスト

弓適正（中）

光耐性（小）

弓装備時確定追撃・

▽そこそこの装備だと思うが。

アンスリア「使っていていいなら使うけど…いいの？」

▽構わない。

▽自分の装備はもうほとんど固定されている。

▽それに別に特殊な効果があるわけでは無い。

▽だから手放しても特に問題はない。

アンスリア「…そう、じゃあ遠慮なく。」
着々とアンスリアの魔改造が進んでいる…

▽最終的にこちら側に来ても大丈夫になるかもな。

アンスリア「え？何か言ったかしら？」

▽いいや、何も。

これ結末どうするんだ…？

▽知らん。

旅人と踊り子と魔法書

今日も旅は続く。

休憩中のようなだ。

∨（本を読んでいる。）

アンスリア「何読んでるの？」

∨魔法書。

アンスリア「魔法書？」

∨読んだら魔法が使えるようになる。

アンスリア「それってすごい物じゃないの？」

普通魔法と言ったら

適性のある人物が修行の末に

手に入れるものであり

本を一度読んだくらいでは身に付くものではない。

∨まあいい事ばかりじゃないぞ。

アンスリア「じゃあどんな問題があるの？」

- ◇ 基本的に普通に習得した魔法は
- ◇ 魔力を消費して発動する。
- ◇ 要は魔力があればいくらでも使える訳だ。
- ◇ アンスリア「その言い方だと魔法書の魔法はずつとは使えないのね？」
- ◇ そうなる。
- ◇ 魔法書を読むと「ストック」が溜まる。
- ◇ これは魔法ごとに分けられるんだが…
- ◇ 魔法書の魔法は
- ◇ 「ストック」と魔力を消費して発動する。
- ◇ 但し「ストック」が無くなっても
- ◇ 使えなくなるだけで経験は残る。
- ◇ アンスリア「ならなくなる前に読んでおく方がいいのね？」
- ◇ だから今読んでる。
- ◇ 旅人は読書を続ける。
- ◇ ああ、他にも欠点があるんだ。

- ◇魔法書の魔法は融通が利かない。
- ◇アンスリア「えつと?…どういう事?」
- ◇「そうだな…どう説明しようか。」
- ◇「例えば炎を出す魔法があったとしよう。」
- ◇「基本的には炎が前に飛び出す呪文だ。」
- ◇「普通に習得した魔法であればいくつかの使用方法が考えられる。」
- ◇「例えば方向を変える。」
- ◇「前じゃなくて全方向にするとか。」
- ◇「他にも小さくして明かり替わりに、とか。」
- ◇「アンスリア「魔法書の魔法は改変ができない、つて事?」
- ◇「そうなる。」
- ◇「前に炎を出す魔法なら」
- ◇「絶対に前に炎を出す魔法として働く。」
- ◇「更に読書が続けながら旅人は語る。」
- ◇「…後、良く分からん魔法もある。」
- ◇「アンスリア「どんな魔法?」」

∨ お前も知っている物だ。

アンスリア「え？」

旅人は魔法を使った。

扉が出来た。

アンスリア「??????」

∨ まあ…アレだな。

アンスリア「これ何時かの杖の…」

∨ そうなる。

∨ 私の世界の魔法を作った者は

∨ 余程扉を作りたかったらしい。

アンスリア「どうして…？」

∨ どうしてだろうな。

正直建築に使うくらいの魔法だ。

どっちか片方でもいいのではないか…？

∨ …ああ、最後に。

アンスリア「…？」

∨ 魔法書にはとびっきりのデメリットがある。

アンスリア「と言うと？」

∨ 読書の失敗による暴走だ。

アンスリア「∴読書の失敗って何よ。」

∨ 分かりやすく言うと解読の失敗。

∨ 解読をミスするとその時点で暴走する。

∨ で、デメリットだが。

アンスリア「∴？」

∨ 今から分かる。

旅人は読書に失敗した。

魔物が召喚された。

アンスリア「∴え？」

∨ と言うわけだ。

魔物が襲い掛かってきた！

アンスリア「嘘でしょ！」

∨ 所がどっこいこれが現実！

戦闘後。

アンスリア「…」

∨…いや悪かったって。

アンスリア「…何か対策方法無いの？」

∨いや別にわざと失敗したただけだが。

アンスリア「…」

∨おいやめろ殴るな痛いんだぞ！

アンスリア「…」

∨無言で殴るな!!

今日も平和である。

∨何が平和だ！

だって自業自得だし。